

土井利勝とその家臣団

「土井利勝とそのゆかりの人々」展

江戸時代初期の古河藩主土井利勝はその当時から徳川家康の子供と噂されていましたが、家康秀忠家光と三代の將軍に仕え古河藩主時代には一六万石という譜代大名としては破格の待遇を受けました。

ところで、利

勝は小見川（千葉県）で初めて一万石の大名となりました。いわゆる子飼いの家臣団をもつていなかった利勝はこのとき幕府の歩行士10人を与えられます。

余談ですが、その子孫は將軍が日光社参で古河城宿泊の際、特別に將軍に目通りが許されたということ。

その後のたび重なる加増により家臣団も急速に拡大しますが、いくつかの特色をみていきますと、まず利勝の弟、元政を自分に代わって藩領内を治める城代とします。元政はすでに旗本となっていたのを利勝が特別に將軍に願って家臣とします。

さらに客分として鮭延越前守家綱を召抱えます。秀綱は出羽の最上家の重臣でしたが最上家の取り潰しにより利勝に預けられていた人物で、この折、秀綱に随従してきた家臣一四名も召抱えられました。



土井利勝像（正定寺蔵）

また三代將軍家光の弟、駿河大納言忠長が自刃した事件後、その付家老朝倉宣正を家臣としています。実は宣正の妻は利勝の妹という関係でした。ほかにも初期家臣団には武甲北条という滅亡した戦国大名の旧臣も多くみられます。

このように利勝家臣団の一面だけからも、当時の政治的背景や、いまだ戦国の気風が残る主従関係のなかで利勝の統率力の確かさを伺い知ることができます。

なお本年7月10日は土井利勝の360回忌にあたり、歴史博物館では「土井利勝とそのゆかりの人々」展を9月12日まで開催いたします。

古河歴史博物館学芸員 鷲尾政市